

平成22年 5月10日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006年 ～ 2009年
 課題番号： 18530591
 研究課題名（和文） シュタイナー教育とその周辺領域への参与観察による人智学共同体の教育人間学的解明
 研究課題名（英文） Clinical and Philosophical Consideration on the anthroposophical community through a participant observation into the Waldorf school
 研究代表者
 西平 直（NISHIHIRA TADASHI）
 京都大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：90228205

研究成果の概要（和文）：

シュタイナー教育を中心とした「人智学共同体」への参与観察を行うと同時に、日本における稽古の思想、とりわけ、世阿弥の稽古の思想に関する哲学的研究を行うことによって、現代社会に対するオルタナティブな運動としての「人智学共同体」の底流にある精神性・霊性・宗教性について、考察を深めた。研究の成果は、稽古の思想研究が中心となった。

研究成果の概要（英文）：

I made a clinical and philosophical consideration on “the anthroposophical community movement” through a participant observation into the Waldorf school and a philosophical investigation into the Japanese traditional thought; the Zeami’s teaching of exercise and expertise.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	800,000	240,000	1,040,000
19年度	800,000	240,000	1,040,000
20年度	800,000	240,000	1,040,000
21年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：シュタイナー教育、稽古、世阿弥、人智学、スピリチュアリティ、世代継承

1. 研究開始当初の背景

本研究は、それ以前の科学研究補助金研究課題「シュタイナー学校出身者への聞き取り調査によるシュタイナー教育の教育人間学

的研究」で確認された課題を発展的に検討することを目的として計画された。

開始当初は、シュタイナー教育を中心にわが国でも様々な広がりを見せている「人智学

共同体 anthroposophical community」を人間形成の視点から解明することを計画した。この共同体運動は、現代社会に対するオルタナティブの試みであると考えられるが、その担い手たちが何を目指し、何を求めているのか。その際、とりわけ、世代継承という視点、現代社会におけるスピリチュアリティという視点に注目することを心がけた。

2. 研究の目的

現代社会に対するオルタナティブの試みの一つである、この共同体運動は、いかなる人たちによって担われているのか。その担い手たちは何を期待しているのか。何を手掛かりとし、何を求めているのか。聞き取り調査を行う中で問題の焦点を突き止めることを目的とした。

ところが、研究の過程で、シュタイナー教育と、日本の芸道思想との関係が問題になってきたため、研究の焦点を修正し、「稽古」の思想とシュタイナー教育との関連を検討することになった。さらに、その課題の中から、世阿弥の思想研究が必要不可欠な課題として浮上し、聞き取り調査と世阿弥の思想研究とを同時並行して進めることとなった。

当初の研究目的と、実質的な成果とが一見すると乖離しているように見えるのは、以上の理由によるが、両者が問題の本質において深く結び付いていることは、以下の研究成果が語る通りである。

3. 研究の方法

(1) 本研究以前の研究の中で関係を構築してきた研究協力者やシュタイナー学校の協力を得て参与観察を継続し、その中で、例えば、子どもたち、保護者、教師、セラピストなどから聞き取り調査を行った。実際に参与観察を行うことができたのは、以下の場所

ある。

①京都の京田辺シュタイナー学校において、11年生クラスのエポック授業を担当し、シュタイナー教育への参与観察を行った。

②情報提供者である川手鷹彦氏の協力による沖縄の治療教育研究所「うーじぬふぁー」において子どもたちとその保護者たちへのインタビューを行った。

③学校法人シュタイナー学園においては、高等部(10-12年生)クラスにおいて特別講義を行い、議論を深めた。

(2) そうした調査研究と並行する仕方で、文献研究の手法による思想研究を続けた。思想研究としては、世阿弥の稽古哲学を深める中で、シュタイナーの教育思想を読み直す視点を深めることとなった。

(3) 調査研究と思想研究との同時並行は、当初より予定していたことであったが、その実質的な成果が、思想研究に重点を置くことになったのは、研究遂行の中で不可避免的に生じてきたことであった。

4. 研究成果

研究の成果は、(1) 参与観察の成果と、(2) 思想研究の成果と、(3) 両者の関連の成果という、三つの点において、示される。

(1) まず、参与観察の成果である。

①京田辺シュタイナー学校におけるエポック授業は、午前中200分間を三日間集中的に行うもので、生徒たちと深く接する機会となった。その中で、生徒たちの声を直接聞くことができ、また、例えば楽器の演奏や、演劇の稽古の場面など、「わざ」の習得場面における小さな会話を収集することができたことは、その後の研究の視点にとって重要な意味を持った。さらに、その中で、この教育における「演劇活動」の重要性が浮かび上がってきた点も重要である。それは単に演技

力を身につけるとか、「生きる力」を学ぶという態度の問題ばかりではなく、むしろ、個別の教科学習に対する「学習の動機づけ」としても、さらには、その学習成果の自己確認の場としても、極めて重要である。しかしこの点に関する詳細な検討は今後の課題である。

②沖縄の治療教育研究所「うーじぬふぁ」をはじめ、川手鷹彦氏の協力によって得ることができた、多くの保護者達からの聞き取り調査の機会もまた、貴重であった。その中で、現代社会において主流となっている学校システムに対するオルタナティブとして、一方で、何らか身体的な「わざ」（実際に身につく技量）を求めつつ、同時に他方では、それを通して精神性や芸術性を求め、さらには、それらの全体性が、「人間性」という言葉によって語られ、期待されていることが明確になった。それは北海道「ひびきの村」に参加する方々の参加動機にも見ることができ、そうした全体的な（ホリスティックな）人間性を、子どもたちに提供するのみならず、大人たちが、自ら習得（回復）する機会を求めている。

③また、シュタイナー教育に期待する親世代の意識地平を理解するためには、人智学にのみ焦点を当てていたのでは不十分である。人智学を核としたその周辺を捉える視点が重要になる。そのために「霊性・スピリチュアリティ」概念との関連が検討課題となり、あるいは「精神世界」という言葉を視野に入れる必要がある。その成果については、下記「発表論文」のうち「ライフサイクルの二重性」に関する論文（『死生学シリーズ』）と、「スピリチュアル・ケア」をめぐる論文とがそれに当たる。

④なお、以上の参与観察の中で、何度か、観察者である私個人の「人智学共同体」との

出会いが問われることになったため、あらためて、その点を文章にしてまとめ、これまでの参与観察に関しても部分的に報告した。下記「発表論文」の「連載・巡礼としてのシュタイナー教育」がそれに当たる。

（2）並行して行われた理論研究の成果は以下の点である。

①シュタイナー教育の根底にある思想的構図を日本の言葉で解きほぐすためには、「芸道思想」が手掛かりになる。この二つの思想が思想的に同一であるという意味ではない。むしろ、その「違い」を明確にする仕方で、シュタイナー教育の独自性を際立たせる。

②その際「わざ」の稽古が中心課題となる。芸道思想における稽古をめぐる議論には、常に、世阿弥の『伝書』が土台となっている。そこで「世阿弥の稽古に関する思想を哲学的に検討する」課題が必要になった。その成果は、下記「発表論文」の数本の世阿弥に関する研究論文の後、『世阿弥の稽古哲学』として上梓された。

（3）調査研究と理論研究の関連について。「参与観察による聞き取り調査」と「文献研究」を同時並行する手法は、以下の点において、有効であったと判断される。聞き取り調査は、「情報提供者」の都合に大きく左右され、当初の予定通りには進まないことが多い。その場合、文献研究を並行させておくことによって、研究の空白期間を有効利用することができる。のみならず、文献研究の中で、聞き取り調査の課題が浮き彫りになってくることもしばしばであった。したがって、こうした同時並行の工夫は、当初の予定通りに進まなかった場合の対応策であると同時に、それ以上に、その両者を往復することそれ自体

が、ひとつの大きな研究の手法として、意識的に追究されるべき課題である。

その意味において本研究は、「シュタイナー教育への参与観察」と「世阿弥の稽古哲学」という具体的な事例に則した、現場と理論を往復する一つのケーススタディの意味を持ったことになる。

なお、こうした方法を継続する仕方で、22年度から5年間の科学研究費が交付されることになった。「オールタナティブ教育における「稽古」の思想と「宗教性・精神性」の教育人間学的解明」（課題番号22530818）。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

1、西平 直「無心の誘惑・無心の強迫—無心・信仰・スピリチュアリティ」『宗教研究』（日本宗教学会）、査読有、2010年2月、42-64頁

2、西平 直「発達と超越の交叉反転としての『超越性』—世阿弥『伝書』を手がかりとして」『教育哲学研究』100号記念特別号、査読有、2009年、263-278頁。

3、西平 直「スピリチュアル・ケアと「我執性」—日本ホリスティック教育協会編『ホリスティック・ケア—新たなつながりの中の看護・福祉・教育』せせらぎ出版、査読有、2009年、156-171頁。

4、Tadashi Nishihira, Outline of Zeami's Philosophy of Practice and Expertise: A Heuristic Resume, in: The Self, the other and Language, The Global COE Programme, Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds, Kyoto University, 2009, Dec. pp.49-54、査読有。

5、西平 直「連載・巡礼としてのシュタイナー教育・最終回」『真夜中』第4号（リトルモア）、査読なし、2009年、114-118頁。

6、西平 直「連載・巡礼としてのシュタイナー教育・第三回」第3号『真夜中』（リトルモア）、査読なし、2008年132-135頁。

7、西平 直「連載・巡礼としてのシュタイナー教育・第二回」第2号『真夜中』（リトルモア）、査読なし、2008年、98-101頁。

8、西平 直「連載・巡礼としてのシュタイナー教育・第一回」創刊号『真夜中』（リトルモア）、査読なし、2008年、108-111頁。

9、西平 直「世阿弥『伝書』における「いまここ」—「時に用ゆるをもて花と知るべし」『人間性心理学研究』第25巻—第2号、査読有、2008年、37-48頁。

10、西平 直「ライフサイクルの二重性—矛盾・逆説・循環」武川正吾・西平直編『シリーズ死生学・第三巻・死とライフサイクル』（東京大学出版会）、査読有、2008年、113-152頁。

11、西平 直「宗教哲学：概念と方法」『岩波講座哲学・第13巻・宗教』（岩波書店）、査読有、2008年、234-252頁。

12、西平 直「子どもと無心—世阿弥における稽古の逆説」哲学会（東京大学文学部哲学科）編『哲学雑誌』第122巻—第794号、特集子ども、（有斐閣）、査読有、2007年、58-76頁。

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 2 件)

1、西平 直『世阿弥の稽古哲学』、東京大学出版会、2009年、296頁。

2、武川正吾・西平直編『シリーズ死生学・第三巻・死とライフサイクル』（東京大学出版会）2008年、1-6頁、113-152頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西平 直 (NISHIHIRA TADASHI)
京都大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：90228205

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：